法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-05-28

人類学の理論的枠組みを応用した日本語学習者のフィールドワーク教育

村田, 晶子 / MURATA, Akiko

(雑誌名 / Journal or Publication Title)
科学研究費助成事業 研究成果報告書
(開始ページ / Start Page)
1
(終了ページ / End Page)
17
(発行年 / Year)
2020-06-10

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：３２６７５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０２８２３

研究課題名（和文）人類学の理論的枠組みを応用した日本語学習者のフィールドワーク教育

研究課題名（英文）Fieldwork Education for Japanese Language Learners: Anthropological Perspectives

研究代表者
村田　晶子（Murata, Akiko）

法政大学・グローバル教育センター・教授

研究者番号：６０５２０９０５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、言語文化教育プログラムにおける文化人類学の枠組みを応用したフィールドワーク教育の実践分析を行ない、言語学習者を対象としたフィールドワークの効果的な指導法と指導上の留意点を明らかにした。また、言語学習者の学習プロセスと成果物の分析を通じて、学習者のフィールドワークを通じた学びがどのようなものであるのかを明らかにした。本研究ではこれらの知見に基づき、教育関係者、学習者が活用できるフィールドワークのガイドラインを作成し、広く言語文化教育の関係者に発信した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
人類学のフィールドワークは言語文化の学びに役立つと指摘されているが（Jurasek 1995）、人類学の理論を応用した言語文化学習におけるフィールドワークの実証的な研究はこれまでほとんど行われてこなかった。本研究は人類学と言語教育の両方のバックグラウンドをもつ教員が中心となり、フィールドワーク教育の意義、教育上の留意点を明らかにしたこれまでにない取り組みであり、本研究で得られた学術的な知見は、言語文化プログラム、国際共修プログラム、多文化共生に資する人材育成など多様な教育プログラムにおいて活用することができる応用範囲の広いものである。

研究成果の概要（英文）：This research clarified the significance and challenges of fieldwork education in language and culture programs. There were three main research outcomes: (1) The research clarified instructional effects and challenges based on the data collected from fieldwork education programs; (2) The research illustrated learners' linguistic and cultural learning by examining their learning processes and outcomes; (3) Based on the findings, the researchers created an educational guideline for language and culture programs.

研究分野：教育人類学

キーワード：フィールドワーク教育　異文化理解　言語文化教育　多文化共生　エスノグラフィー　日本語教育　複言語教育　共修

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

文化人類学で用いられるフィールドワークは、現地調査の過程で様々な人々と関わりをもち、そのプロセスの中で現地の人々の生活世界を理解するホーリスティックな社会調査の方法であり、外国語学習においても人類学のフィールドワークは言語文化の学びに役立つと指摘されている（Jurasek 1995）。しかし、人類学の理論を応用した言語文化学習におけるフィールドワークの実証的な研究は非常に少なく、人類学と言語文化教育のバックグランドをもつ研究者の連携による体系的な実践研究が強く求められている。

２．研究の目的

そこで本研究では文化人類学と言語文化教育（日本語教育、英語教育）の専門性をもつ研究者が中心となり、言語文化教育においてフィールドワークのトレーニングをどのように取り入れることができるのか、教育実践の分析を行ない、フィールドワーク教育を実施するためのガイドラインを策定・発信することを目的とする。本研究の調査項目は以下の 3 点である。

(1)　言語文化教育プログラムにおける文化人類学の枠組みを用いたフィールドワーク教育の実践を分析し、効果的な教育のあり方、指導上の留意点を明らかにする。

(2)　言語学習者がフィールドワークを行なうことによってどのような学びがあるのかを、学習プロセスと成果物の分析を通じて明らかにする。

(3)　調査で得られた知見に基づき、言語文化教育においてフィールドワークを活用するためのガイドラインを作成し、言語文化教育、国際共修、多文化共生教育などの研究者、教育関係者に広く発信する。

３．研究の方法

本研究は平成 28 年度から平成 31 年度までの４年間行ったもので、調査の対象は関東の大学で実施されている多文化フィールドワークプログラム（留学生と国内学生の協働フィールドワーク）及び留学生を主な対象としたフィールドワークプログラムである。

分析したデータは、フィールドワーク教育のシラバス、指導方法、教材、教員のインタビュー記録、学習者のフィールドワークの実践記録（学習者のフィールドでの観察と振り返りの記録、学習者が実施したインタビューの文字化データ、振り返りセッションの録画データ、最終発表の録画データ、最終レポート、学習者のインタビューデータ）などである。データはすべて調査協力者の許可を得たうえで収集した。

４年間の調査の流れとして、初年度はフィールドワーク教育の実践データの収集と分析を集中的に行い、フィールドワーク教育の方法、意義、指導の留意点などを明らかにした。そして、２年目以降は継続してデータの収集・分析を進めると同時に、分析で得られた知見をまとめ、フィールドワーク教育のガイドラインの策定を進めた。

４．研究成果

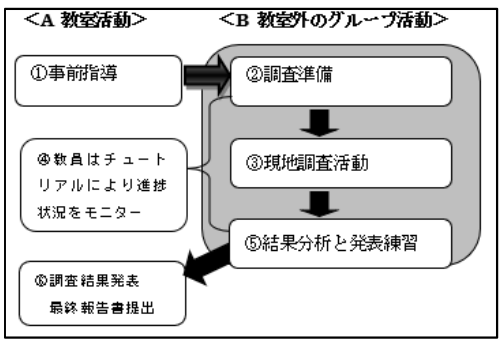
本研究で得られた知見は、学会発表（27 件、うち招待講演 4 件、国際学会 19 件）、研究論文（12 件、うち査読付き論文 8 件、国際共著 4 件）、図書（6 件）などによって対外的に発信した（村田 2020,2018a, 2018b, 2017a, 2017b, 2016, 村田・マリオッティ 2018, 村田・佐藤 2016, 村田・箕曲・佐藤 2021, 村田・中山・藤原・森茂 2019, 佐藤・村田 2018 など）。

本研究で得られた主な知見は以下の３点である。

(1)　フィールドワーク教育のデザイン分析から得られた知見

分析した言語文化教育プログラムにおけるフィールドワーク教育の流れは以下のとおりで（図1）、教育デザインとして分析した項目は、事前指導、フィールドワーク中の指導、最終成果物作成の指導方法などである。

図１　教室活動とフィールドワークの流れ



フィールドワークの事前指導の分析においては、質的調査の意義、調査計画の立て方、資料収集の指導方法などを分析し、教員が学習者の背景（言語レベル、学年、社会調査の経験の有無、専門分野等）に応じて段階的に指導していくプロセスを明らかにした。
次に、フィールドワーク実施中の指導の分析では、教員が振り返りセッションにおいて学習者にフィールドワークの状況を言語や映像を用いて可視化させていくプロセスを明らかにした。そして、教員がプログラムを通じて継続的に学習者にフィールドワークの振り返りと今後に向けた改善を促すことによって、学習者が変化していくプロセスを明らかにした。
またグループフィールドワークの指導においては、各メンバーが自分の役割に責任をもちつつ、協働でフィールドワークを遂行するための教員による意識づけのプロセスを明らかにした。そして、メンバー間で深刻なトラブルが生じた際には教員がどのように介入し、グループでのフィールドワークを支援しているのかなど、指導実践の詳細と学習者の変化を明らかにした。
留学生と国内学生の協働フィールドワークのメンバー構成に関しても分析を行ない、学習者の背景（出身国・地域、日本語レベル、英語レベル、第一言語、専門など）の多様性に配慮してグループを編成することが学習者の相互学習、相互支援を活性化させるうえで役立つことを示した（学習者の組み合わせ例は表１参照）。

表１　グループフィールドワークにおける学習者の組み合わせ例

	学習者	名前（仮名）	英語レベル	日本語レベル
1	留学生	スミス	第一言語	初級
2		リリー	上級	上級
3		リー	中級	中級
4	国内学生	田中	上級	第一言語
5		中山	中級	
6		吉田	中級	

さらに、教員による学習者の振り返りセッションの指導の分析においては、教員が学習者たちに「他者」を本質的に語ることの問題点を意識させる指導方法を分析し、学習者たちの変化の観察から、こうした指導方法が学習者たちの多様性に対する理解を深め、彼らのフィールドにおける人とのかかわり方、自分自身の立場性を内省させるうえで役立つことを示した。
最後に複数の専門性をもつ教員チームによるフィールドワーク教育の実践を分析することを通じて、教員間の分野横断的な連携の意義を明らかにした（英語教育、日本語教育、文化人類学、社会学の専門性を有する教員の連携等）。

(2)　学習者の学び

言語文化教育プログラムにおける学習者のフィールドワーク体験を通じた学びを、①言語の４技能の総合的な運用力、②質的調査法のスキル、③文化の多様性の理解、多様な人々との協働力にわけて分析した。

①言語学習：学習者のフィールドワークのプロセスと成果物の分析を通じて、フィールドワークが言語の運用力を高める機会として様々な形で活用されていることを明らかにした。フィールドワークの事前準備において、テーマに関する情報を集めてまとめることが読解と要約の練習となっていること、調査地でのインタビューが多様な他者と関わり、会話や聞き取りの練習をするうえで役立っていること、データの記録や振り返りがグループディスカッションや書く練習の機会となっていること、最終発表、最終レポートの作成が情報を要約し、日本語で他者に発信する機会となっていることなどを具体的な学習者の実践データから示し、フィールドワークが学習者に幅広い言語運用の機会を提供し、言語学習の動機づけにもつながっていることを明らかにした。
言語レベル別に見ると、初級の学習者にとってのフィールドワークは、教室外で人とかかわり、簡単な日本語を用いてコミュニケーションを取り、相手と交流する機会として活用されていることを示した。また、中上級レベルの学習者にとっては、フィールドワークが日本語の４技能の総合的な運用力を高める機会となっていることを学習者の振り返りと調査実践データから示した。

②社会調査のスキル

フィールドワークは言語の運用力を向上させる機会であるとともに、社会調査の基礎的なスキル、社会文化の分析力を高める機会でもある。学習者たちのフィールドワークの実践データからは、彼らが自分自身の調査者としての立場を振り返り、他者や他者の文化を本質的に語ることの政治性、権力性を意識しながら、自分とフィールドで関わった人びととの関係性をより深く考えるようになっていく変化のプロセスが観察された（表２参照）。

表２ 学習者のフィールドワークの振り返り例(下線は筆者が付記)

①	自分は最初は完全なアウトサイダーだと思ったが、完全に間違っていた。フィールドワークを通じて自分がインタビューした人達の背景と共通点があることに気が付いた。自分は特殊な環境で育ってきたので、人と違うことをずっと悩んできた。しかし、コリアンタウンの人々の話から彼らの生き方について知って、結局、自分の環境を良くするのも悪くするのも自分次第なのだということを教えてくれた。
②	私は韓国人だが短期の留学生なので、立場は、コリアンタウンの内部者ではないけど完全に外部者でもなかったと思う。フィールドワークで、コリアンタウンの人々が日本に満足していることを聞いて、逆に自分の気持ちに気付いた。自分こそが日本を住みにくいと感じ、その気持ちをフィールドの人々に投影していたのだ。

③多様な他者との協働力

グループでのフィールドワークプロジェクトの分析では、グループメンバーが協働作業において感じた困難にどのように対処していったのかを明らかにし、多様な他者との協働力が向上していくプロセスを示した。これにより、グループフィールドワークと振り返りの実践が、多様な他者と協働するために必要な態度や資質、コミュニケーション力、プロジェクト遂行力、リーダーシップ、相互サポートなどの重要性に気付き、学習者が変化し、成長するための機会となっていることを明らかにした。

(3) フィールドワーク教育のガイドライン

上記の分析結果を踏まえて、言語文化プログラムにおけるフィールドワーク教育の活用のガイドラインを策定し（村田・箕曲・佐藤 2021，村田・中山・藤原・森茂 2019)、言語教育プログラムにおいてフィールドワークを実施するための方法と留意点を示した。

ガイドラインは三部で構成され、第一部ではフィールドワークの経験のない学習者、あるいは指導経験のない教員がフィールドワークを実施することができるように、段階的にフィールドワークの実施方法と留意点を示した。具体的には、事前準備の方法（情報収集、テーマ選び、調査計画の立て方等)、フィールドワークの実践方法（文化人類学とフィールドワークの関係、質的データの特色、インタビューと観察の方法、調査のマナー、調査協力依頼書の作成、フィールドノートの記録方法、振り返りの方法)、結果のまとめ方、最終成果物の作成と発信の方法などについて解説した。

第二部では、学生の実施した多様なフィールドワークの実践例を提示し、多様なテーマにおけるフィールドワークの可能性を示すとともに、フィールドワークを実施した学生たちが感じた困難点、失敗例を提示することを通じて、フィールドワークを行なう際の留意点を示した（表３参照)。そして第三部では、多様な地域で実施したフィールドスクールの実践をまとめ、フィールドワークの具体的な指導方法と指導上の留意点を示した。

表３ 学習者のフィールドワークの実践例（ガイドラインの第二部から）

	フィールドワークのテーマ	フィールドワークの留意点
1.	恋愛	調査協力者との関係性の構築
2.	ことばを学ぶこと	調査の方向転換によって学べること
3.	国際交流	現場の改善を目指したフィールドワークとは
4.	クラブ活動の魅力	密着取材とフィールドワークの関係
5.	クラブ活動の人間関係	インサイダーとしてのフィールドワークの意味
6.	食べること	相手が言わないことは何か
7.	買うこと	インタビューへの恐れをどう克服するか
8.	就職活動	自分自身の経験をどう記述・分析するか
9.	若者の政治意識	調査者の先入観
10.	宗教のふしぎ	自分の価値判断を保留できるか
11.	アルバイト先の外国人労働者	調査場所の問題
12.	街のフィールドワーク	多文化グループでの協働
13.	祭りのフィールドワーク	記事を書くことによる現場への還元
14.	外国出身者のライフストーリー	ライフストーリーをどう行うか

本研究成果の学術的意義と社会的意義

人類学の理論を応用した言語文化学習におけるフィールドワークの実証的な研究はこれまでほとんど行われておらず、本研究はこの分野の先駆的な研究として位置付けられる。本研究の知見は、言語文化教育におけるフィールドワークの活用の可能性を示すことで、この分野の教育研究を発展させていくために役立つものであると同時に、幅広い教育分野において活用することができるものであると考える。

当初の研究計画では、言語学習者のフィールドワークを通じた学びを明らかにすることを主目的としていたが、調査において留学生と国内学生の協働フィールドワークの分析を行なうことを通じて、フィールドワークが、多様な背景をもつ学生たちが学び合い、協働学習を通じて人間的に成長する機会でもあることを示した。
本研究で得られた知見は、フィールドワーク教育が他者理解のためのコミュニケーション力を高め、社会において多様な人々とつながり、協力して社会を構築していくための態度と資質を高めていく上で有用であることを示唆しており、国際共修、多文化共生社会を構築する人材育成などにも活用することができるものであることを示している。こうした点からも本研究の社会的な意義は大きいと考える。
今後の展望としては、本研究で得られた知見を踏まえて、さらに言語文化教育プログラムにおけるフィールドワーク教育の長期的なインパクトを追跡調査したいと考える。そして、国内外の教育関係者が広く用いることができる汎用性の高い異文化間協働フィールドワーク教育のガイドラインを発信していきたい。

＜引用文献＞

① 村田晶子・箕曲在弘・佐藤慎司（2021予定）『多文化フィールドワークを学ぼう』ナカニシヤ出版
② 村田晶子(2020)『外国人労働者の循環労働と文化の仲介：ブリッジ人材と多文化共生』明石書店
③ 村田晶子・中山京子・藤原孝章・森茂岳雄(2019)『チャレンジ！多文化体験ワークブック：国際理解と多文化共生のために』ナカニシヤ出版
④ 佐藤慎司・村田晶子 (2018)『人類学・社会学的視点からみた過去、現在、未来のことばの教育：言語と言語教育イデオロギー』三元社
⑤ 村田晶子 (2018a)『大学における多文化体験学習への挑戦：国内と海外を結ぶ体験的学びの可視化を支援する』ナカニシヤ出版
⑥ 村田晶子(2018b)「日本語教育・言語評価・フィールドワークの融合がもたらす多文化共生コーディネーターの可能性」平成29年度国立国語研究所日本語教師セミナー「地域に定住する外国人の日本語使用と言語生活について考える ：縦断調査の結果や多言語社会としての日本の現在を踏まえながら」
⑦ 村田晶子・マルチエッラ・マリオッティ(2018)「国際ボランティアプログラムにおける互恵性のデザイン」村田晶子編著『大学における多文化体験学習への挑戦：国内と海外を結ぶ体験的学びの可視化を支援する』ナカニシヤ出版（pp.126-139）
⑧ 村田晶子（2017a)「異文化協働プログラムの両義性と境界線－境界線を乗り越えるための教育デザインの実践分析－」『異文化間教育』(46)30-46.
⑨ 村田晶子（2017b)「国際ボランティアプログラムにおける互恵性のデザインと学生間の学び合いの分析」『ボランティア学研究』(17)119-128.
⑩ 村田晶子(2016) 「社会的行為としてのOPIインタビュー活動の可能性」日本語プロフィシェンシー研究(JALP) (4) 62-74.
⑪ 村田晶子・佐藤慎司(2016)「人類学の方法論に基づいた日本語教育におけるフィールドワークプロジェクト」『ヨーロッパ日本語教育』(20) 90-95.
⑫ Jurasek, R. (1995). Using ethnography to bridge the gap between study abroad and the on-campus language and culture curriculum. In C. Kramsch (Ed.), Redefining the boundaries of language study (pp. 221-251). Boston: Heinle & Heinle.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計12件（うち査読付論文　8件／うち国際共著　4件／うちオープンアクセス　8件）

１．著者名 村田晶子・竹山直子・長谷川由香・池田幸弘	４．巻 10
２．論文標題 留学生の多様化に対応した新しい日本語教育プログラムの役割―教育のグローバル化の流れの中で―	５．発行年 2019年
３．雑誌名 法政大学教育研究	６．最初と最後の頁 33-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 村田晶子・池田幸弘	４．巻 10
２．論文標題 日本語教育におけるアカデミックライティング教育の役割 ―専門領域、チューター制度との連携を目指して―	５．発行年 2019年
３．雑誌名 法政大学教育研究	６．最初と最後の頁 5-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Noriko Ishihara	４．巻 -
２．論文標題 Identity and Agency in L2 pragmatics	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Routledge Handbook of SLA and Pragmatics	６．最初と最後の頁 161-175
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 村田晶子	４．巻 19
２．論文標題 日本留学における体験の言語化プロジェクトの分析	５．発行年 2018年
３．雑誌名 BATJ Journal	６．最初と最後の頁 26-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Taguchi, N., & Ishihara, N.	4．巻 38
2．論文標題 The pragmatics of English as a lingua franca: Research and pedagogy in the era of globalization	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Annual Review of Applied Linguistics	6．最初と最後の頁 80-101
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 村田晶子	4．巻 46
2．論文標題 異文化協働プログラムの両義性と境界線：境界線を乗り越えるための教育デザインの実践分析	5．発行年 2017年
3．雑誌名 異文化間教育	6．最初と最後の頁 30-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 村田晶子	4．巻 17
2．論文標題 国際ボランティアプログラムにおける互恵性のデザインと学生間の学び合いの分析	5．発行年 2017年
3．雑誌名 国際ボランティア学会	6．最初と最後の頁 119-128
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 野山広・嶋田和子・村田晶子	4．巻 21
2．論文標題 在住外国人の日本語会話能力と言語生活に関する縦断研究：Welfare Linguistics という観点から	5．発行年 2017年
3．雑誌名 ヨーロッパ日本語教育	6．最初と最後の頁 101-102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 村田晶子	4．巻 4
2．論文標題 社会的行為としてのOPIインタビュー活動の可能性	5．発行年 2016年
3．雑誌名 日本語プロフィシェンシー研究	6．最初と最後の頁 62-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 村田晶子・佐藤慎司	4．巻 －
2．論文標題 人類学の方法論に基づいた日本語教育におけるフィールドワークプロジェクト	5．発行年 2016年
3．雑誌名 第19回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム論文集	6．最初と最後の頁 90-95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 村田晶子・Marcella Mariotti	4．巻 －
2．論文標題 トランスナショナルな双方向共修活動と日本語教育の接点 ―越境する学びの共同体の形成とことば、文化の学び―	5．発行年 2016年
3．雑誌名 2016 年日本語教育国際研究大会プロシーディング	6．最初と最後の頁 －
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 Noriko Ishihara	4．巻 6(5)
2．論文標題 Teaching pragmatics in support of learner subjectivity and global communicative needs: A peace linguistics perspective	5．発行年 2017年
3．雑誌名 Idee in Form@zione: Periodico per la formazione degli insegnanti: Professionalita docente ed efficacia educative	6．最初と最後の頁 17-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計27件（うち招待講演　4件／うち国際学会　19件）

１．発表者名 村田晶子
２．発表標題 EMIプログラム(英語による専門教育）と日本語教育の関係性―複言語教育の視点から―
３．学会等名 2019年度MHB研究大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 村田晶子
２．発表標題 日本語教育プログラムにおけるGoogle Classroomの活用実践の分析
３．学会等名 CASTEL/J 2019（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Akiko Murata
２．発表標題 The Effectiveness of Verbalizing and Writing the Experience of Japanese Food Culture in the Japanese Language Education
３．学会等名 The Twenty-Sixth Annual Japan Studies Association Conference（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Noriko Ishihara
２．発表標題 A Narrative Approach to Teaching Pragmatics and Intercultural Awareness: Learner and teacher development
３．学会等名 JALT Kochi（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 村田晶子
２．発表標題 IDCを活用した留学体験の言語化の可能性
３．学会等名 2018 SIETAR Japan World Congress（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 村田晶子
２．発表標題 「留学体験の言語化」プロジェクトが日本語教育にもたらす可能性
３．学会等名 ヴェネツィア2018年日本語教育国際研究大会（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 村田晶子
２．発表標題 大学における多文化共修と CCBI の接点
３．学会等名 批判的言語教育国際シンポジウム（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Akiko Murata
２．発表標題 Critical Reflections on Study Abroad Experiences in Writing Classes
３．学会等名 The 17th JALT PanSIG Conference
４．発表年 2018年

１．発表者名 村田晶子
２．発表標題 体験型訪日プログラムにおける活動とコーチングの分析
３．学会等名 AATJ 2018 Annual Spring Conference（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 村田晶子
２．発表標題 日本語教育とフィールドワーク：日本の学生との協働が生み出す主体的な学び
３．学会等名 日本語教育セミナー（主催：中国安徽省の大学連合）（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 村田晶子
２．発表標題 日本語教育・言語評価・フィールドワークの融合がもたらす多文化共生コーディネーターの可能性
３．学会等名 平成29年度国立国語研究所日本語教師セミナー「地域に定住する外国人の日本語使用と言語生活について考える ―縦断調査の結果や多言語社会としての日本の現在を踏まえながら―」（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 村田晶子
２．発表標題 日本留学における体験の言語化プロジェクトの分析
３．学会等名 第20回BATJ年次大会（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 村田晶子
２．発表標題 留学生受け入れプログラムにおける英語による専門科目（EMI）と日本語科目の最適なバランスとは
３．学会等名 International Forum 2017: Trends and Prospects of Student Mobility and Support in The Asia-Pacific Region（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 村田晶子
２．発表標題 Challenges and Possibilities in International Classrooms
３．学会等名 Global TC Day
４．発表年 2017年

１．発表者名 村田晶子
２．発表標題 異文化協働プログラムの両義性と境界線越え
３．学会等名 異文化間教育学会第38回大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 Sachiko Horiguchi
２．発表標題 Diversifying Knowledge on Japan at the Level of Educational Practice: Advantages and Challenges of a ‘Native’ Anthropologist’s Attempts to Teach English-medium Undergraduate Courses on Japan
３．学会等名 British Association for Japanese Studies (Japan Chapter) Spring 2017 Mini-Conference: Critiques of/in Japanese Studies: New Challenges and New Approaches（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Sachiko Horiguchi & Junko Teruyama
２．発表標題 Contemporary Japan: A Team-Ethnography of Communication Skills Workshops for Adults with Communication Problems
３．学会等名 15th International Conference of the European Association for Japanese Studies, The Universidade NOVA de Lisboa（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Sachiko Horiguchi
２．発表標題 A Bilingual Autoethnographic Memoir of My Educational Experiences in Japan and the U.S.: Reflections on How I Became Who I Am
３．学会等名 Anthropology of Japan in Japan (AJJ) Fall Meeting 2017
４．発表年 2017年

１．発表者名 村田晶子・Yuko Prefume
２．発表標題 日米2キャンパスにおける双方向共修活動の教育デザイン分析－日本語教育への応用－
３．学会等名 AATJ 2017 Annual Spring Conference（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Akiko Murata
２．発表標題 Enriching Study-Abroad Experiences Through an Innovative Language and Culture Program
３．学会等名 Forum on Internationalization in Higher Education 2017（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 村田晶子・Marcella Mariotti
２．発表標題 トランスナショナルな双方向共修活動と日本語教育の接点―越境する学びの共同体の形成とことば、文化の学び―
３．学会等名 2016 年日本語教育国際研究大会（国際学会）
４．発表年 2016年

１．発表者名 村田晶子
２．発表標題 Welfare Linguisticsから見た現場生成型の言語調査とインタビュー実践の可能性の分析
３．学会等名 第20回AJEヨーロッパ日本語教育シンポジウム（国際学会）
４．発表年 2016年

１．発表者名 Sachiko Horiguchi
２．発表標題 Diversifying Anthropological Knowledge on East Asia in Teaching Practice: Advantages and Challenges of Attempts for an 'Interactive Anthropology' in Japan.
３．学会等名 Society for East Asian Anthropology, American Anthropological Association, Hong Kong Conference 2016（国際学会）
４．発表年 2016年

１．発表者名 Sachiko Horiguchi
２．発表標題 日本を通して自己を見つめる―JETプログラムをきっかけに来日した外国人日本研究者の語りをめぐって（Reflecting on the Self through Engagement with Japan: An Analysis of Narratives of Foreign Japan Scholars Who Set Foot on Japan as JET Programme Participants）
３．学会等名 Japanese Society of Cultural Anthropology 50th Annual Meeting（国際学会）
４．発表年 2016年

１．発表者名 Noriko Ishihara, David Olsher, Kathleen Bardovi-Harlig, & Nancy Bell
２．発表標題 Teaching the pragmatics of English as an international language (EIL): Some ideas and examples
３．学会等名 The 51st Annual TESOL Convention（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Noriko Ishihara
２．発表標題 Applying pragmatics theory and pedagogy to professional development for diplomats: A Peace linguistics approach
３．学会等名 The 3rd International Conference of the American Pragmatics Association (AMPRA)（国際学会）
４．発表年 2016年

１．発表者名 Sachiko Horiguchi
２．発表標題 Envisioning Individual and Social Change: An Ethnography of Communication Skills Workshops for Adults with Autism Spectrum Disorder
３．学会等名 The 20th Asian Studies Conference Japan (ASCJ)（国際学会）
４．発表年 2016年

〔図書〕　計6件

１．著者名 村田晶子	４．発行年 2020年
２．出版社 明石書店	５．総ページ数 194
３．書名 外国人労働者の循環労働と文化の仲介：ブリッジ人材と多文化共生	

１．著者名 村田晶子，中山京子，藤原孝章，森茂岳雄編著	４．発行年 2019年
２．出版社 ナカニシヤ出版	５．総ページ数 100
３．書名 チャレンジ！多文化体験ワークブック：国際理解と多文化共生のために	

１．著者名 村田晶子・箕曲存弘・佐藤慎司編著	４．発行年 2021年
２．出版社 ナカニシヤ出版	５．総ページ数 149
３．書名 多文化フィールドワークを学ぼう	

１．著者名 佐藤慎司・村田晶子（編）	４．発行年 2018年
２．出版社 三元社	５．総ページ数 271
３．書名 人類学・社会学的視点からみた過去、現在、未来のことばの教育:言語と言語教育イデオロギー	

１．著者名 村田晶子（編著）	４．発行年 2018年
２．出版社 ナカニシヤ出版	５．総ページ数 240
３．書名 大学における多文化体験学習への挑戦：国内と海外を結ぶ体験的学びの可視化を支援する	

１．著者名 ジョイ・ヘンドリー著、桑山敬己・堀口佐知子翻訳	４．発行年 2017年
２．出版社 法政大学出版	５．総ページ数 382
３．書名 ＜増補新版＞社会人類学入門―多文化共生のために	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	山田　泉 (Yamada Izumi) (30210438)	法政大学・キャリアデザイン学部・講師 (32675)	
研究分担者	堀口　佐知子 (Horiguchi Sachiko) (30514541)	法政大学・グローバル教育センター・講師 (32675)	
研究分担者	石原　紀子 (Ishihara Noriko) (90523126)	法政大学・経営学部・教授 (32675)	